

〔書評と紹介〕

『新編弘前市史』資料編1（考古編）

福田 友之

弘前市が市制一〇〇周年記念事業として取り組んでいる新編弘前市史刊行事業（全十一巻）の第一冊目として、このたび本書（本文六四九ページ）が刊行された。これは新編弘前市史資料編1（考古編、古代・中世編の二分冊）のうちの第一分冊であり、自然と考古の分野をあつかっている。構成は以下のとおりである。

口絵（カラー写真十五ページ）

第一章 地形と地質（七十六ページ、図九、表六枚。山口義伸・鎌田

耕太郎・古川克彦氏）

第一節 地質の概要

第二節 地質系統一覧

第三節 東北日本弧の古地理

第四節 弘前地域内の地質系統の放射年代一覧表

第五節 温泉

文献リスト

第二章 旧石器・縄文・弥生（一一〇ページ。図二十七、表十五枚。

村越 潔氏）

第三章 古代（二〇五ページ。図一二三、表十枚。三浦圭介氏）

第四章 中世・近世（五十六ページ。図二十四、表四枚。工藤清泰氏）

第五章 弘前市内の主な遺跡（一九八ページ。写真三十八、図一三八、表二枚。村越・三浦・工藤氏）

巻末（カラー写真二十四ページ）

〈付図〉五枚

市内源泉分布図、市内遺跡分布図（縄文・弥生）、市内遺跡分布図（古代・近世）、市内遺跡遺構図（野脇遺跡・境関館遺構配置図）

これらの構成のなかで、まず第一章の地形・地質分野については、考古学が専門の筆者にとつては、まったくの門外漢であるため盛られた内容について云々することはできない。ただ、各節ごとに難解な専門用語に対して用語解説を付し、さらに章末に弘前地域の地質・鉱物・地形等の関連文献リストを掲げていることは、読者にとつてたいへん親切であり、また便利なものとなろう。

つぎの第二章から第五章までが考古分野をあつかっている。多少、羅列的にはあるが紹介する。第二章は「旧石器・縄文・弥生」であるが、第一節の「旧石器時代」では、〈旧石器時代の概観〉、〈青森県の旧石器時代〉などの項目をたててそれぞれ述べている。また、第二節の「縄文時代」では、〈我が国における土器の出現〉・〈東北地方における土器の出現〉、そして〈青森県における土器の出現〉の項目をたて、

後者では縄文時代草創期以降、早期、中期、後期、晩期の六期区分にしたがって、各時代の土器について多数の写真を用い解説している。また、そのほかに「縄文時代の石器及び石製品」▽、「縄文時代の生活」▽、「縄文時代の工芸」▽という項目をたて、本県の縄文遺跡から出土した石器・石製品・土製品・骨角牙器など土器以外の出土品について手際よくまとめており、とくに石器・石製品については器種ごとの年代的な消長を一覧表にまとめている。また、本県の貝塚から出土した貝類・魚類・哺乳類・鳥類などの自然遺物についても遺跡・年代ごとにまとめた一覧表としているのは、本県縄文人の食生活を知るうえでたいへん便利である。また、本県など東北地方が中心であった亀ヶ岡文化の編物・漆製品などの工芸技術の高さについても触れている。つぎに、第三節の「弥生時代」では、「時代区分と弥生土器の編年」▽、「弥生時代の初期稲作について」▽の項目をたて、青森県の弥生土器の移り変わり、稲作のわが国への伝播について述べ、ついで執筆者自身がかかわった「砂沢遺跡」▽（弘前市）、「垂柳遺跡」▽（田舎館村）の二遺跡、そして、「青森県における弥生時代の終局」▽についても触れている。つぎに、第四節の「住居と集落」では、「旧石器時代の住居跡」▽、「縄文時代の住居跡」▽、「縄文時代の集落」▽、「弥生時代の住居跡」▽の項目をたて、本県における縄文・弥生時代の住居跡の変遷を概観している。第五節の「葬法」では、「土壙墓」▽として、縄文時代の土壙墓、人骨の出土した土壙墓、弥生時代の土壙墓、「石棺墓と集石・配石遺構」▽として、石棺墓、集石・配石遺構、「甕棺（土器棺）墓」▽として、縄文時代の甕棺墓、弥生時代の甕棺墓という項目をたて、本県の縄文・弥生時代の墓地遺跡をまと

め、墓制とその変遷について概観している。

つぎの第三章の「古代」であるが、第一節の「古代に関する考古学研究略史」では、明治・太平洋戦争と太平洋戦争後に大きく分け、その研究の歩みを遺跡調査を軸にして概観している。第二節の「古墳時代」では、「古墳時代の概観」▽、「古墳時代の遺跡と文化」▽の項目をたて、この時代を三世紀末～四世紀前半代、四世紀後半代～五世紀代、六世紀代の三期に区分して、本県では数少ないこの時代の遺跡・遺物について、^{そごくごもん}縄文遺跡一覧表・分布図のほかに未発表資料を含めた集成図とともに概観している。第三節の「飛鳥・奈良・平安時代」では、「各時代の概観」▽としてこの時代を七世紀～八世紀、九世紀～一〇世紀前半、一〇世紀後半～一一世紀、一二世紀代の四期に区分し、本県の各時代の遺跡を概観している。ついで、「集落と住居」▽についても同様に七・八世紀、九世紀～一〇世紀前半、一〇世紀後半～一一世紀、一二世紀に四期区分し、本県古代のおもに集落や住居跡の構造の変化について、豊富な図とともに概観している。つぎの「古代の生産活動と生活用具」▽では、農生産物と農具、鉄生産と鉄製品について、本県から出土した農具・製鉄・鍛冶遺構・鉄製品の図を添えて概観している。ついで、土器生産のうち津軽地方の土師器と擦文土器の項目では、これらを大きく古代前期と古代後期に二分したあと、それぞれをさらに二期、五期に細分し、古代前期Ⅰ期（七世紀代）、Ⅱ期（八世紀代）、古代後期Ⅰ期（九世紀初頭～九世紀中葉）、古代後期Ⅱ期（九世紀後葉～一〇世紀前葉）、古代後期Ⅲ期（一〇世紀中葉～一〇世紀後葉）、古代後期Ⅳ期（一〇世紀末～一世紀末）、中世Ⅰ期（一二世紀代）として土師器・かわらけ、擦文土

器・捺文遺跡分布図など多数の資料を添えて詳述している。また、津軽地方で生産された須恵器の項目では、五所川原市にある前田野目窯跡や持子沢窯跡群について窯跡の図を添えて紹介し、さらに集落出土の須恵器図を示し、津軽産の須恵器の供給先について述べている。このほか、漆器・木器生産、塩業、漁業、機織り、馬産と関連遺物、蔵手刀、工具、その他の生活用具について、本県の出土資料を各資料ごとに集成図・一覧表等を作成し概観している。つぎの古代の文化と信仰Ⅳでは、祭祀と仏教文化の波及、文字資料と文字文化、葬制（終末期古墳）について、本県関係の関連資料を集成し、一覧表・分布図・遺物・遺構図を示し概観している。最後の古代の交易・交流Ⅴでは、津軽と東北地方南部以南や北方との交易・交流について、とくに東北地方南部以南からの搬入品の資料を図示し概観している。

つぎの第四章の「中世・近世」であるが、第一節の「中世・近世遺跡の概観」では本県のこの時期の遺跡一覧表を示し、第二節の「中世・近世の考古学研究略史」では、本県の中・近世遺跡を考古学的視点からとらえた研究は昭和以降のこととしてその歩みをたどっている。第三節の「中世・近世の住居と集落」では、本県のこの時期の建物跡の発見される遺跡、建物の種類、时期的な変遷、機能について一覧表・各種建物跡の図を示し概観している。第四節の「中世・近世の生活用具」では、本県の各種出土品を食膳具・調理具・貯蔵具・灯火具・暖房具・大工道具・文房具・馬具・武器ほか十七種に分けてまとめている。また、第五節の「陶磁器類」では、本県出土の陶磁器類を二二世紀Ⅴ、一三世紀Ⅵ、一四世紀Ⅶ、一五世紀Ⅷ、一六世紀Ⅷ、一七世紀以降Ⅷ

の各様に六期区分し、各時期について多数の図を示して概観している。また、△陶磁器の組成Ⅷでは遺跡ごとの青磁・白磁などの舶載陶磁器や瀬戸・珠洲・越前・渥美などの国産陶磁器類について一覧表としてまとめ、さらに遺跡ごとの構成比率を比較し、时期的な変化についてもふれている。第六節の「金属製品」では、本県出土の鉄製品を概観し、さらに埋納銭の遺跡・銭貨名の一覧表を示している。第七節の「出土遺物と生活」では、とくに宗教・葬制や文字などについて簡単に触れている。

つぎに、第五章の「弘前市内の主な遺跡」では、市内の全遺跡二二四ヶ所の遺跡のうち、遺跡内容がある程度わかる二十六ヶ所について紹介している。これらの遺跡は昭和三十年代中頃の岩木山麓の大規模農地開発や近年の道路改良・河川改修などの諸開発にもなっており行われたものが主体となっている。第一節の「縄文・弥生時代の遺跡」では、△沢部Ⅱ号Ⅷ、△天王沢Ⅷ、△尾上山Ⅷ、△黄金山Ⅷ、△大森勝山Ⅷ、△十腰内Ⅷ、△十面沢Ⅷ、△砂沢Ⅷ、△高長根山Ⅷ、△弘前城内Ⅷ、△牧野Ⅷ、△牧野ⅡⅧ、△神原Ⅷ、△尾上山ⅧⅠⅧ、△尾上山ⅧⅡⅧ、△鬼沢猿沢Ⅷの十六ヶ所の遺跡、また、第二節の「古代の遺跡」では、△中野Ⅷ、△下恋塚Ⅷ、△石川長者森Ⅷ、△中崎館Ⅷ、△茶毘館Ⅷ、△独狐Ⅷ、△小友Ⅷの七ヶ所、そして最後第三節の「中世・近世の遺跡」では、△境関館Ⅷ、△堀越城Ⅷ、△野脇Ⅷの三ヶ所の遺跡などについて、それぞれ遺跡の所在地、立地（地形）、調査（発見）の経緯・発掘状況、検出遺構、出土遺物などについて写真や図を用いて紹介している。

以上が本書の概要であるが、つぎに本書への私見を述べてみたい。

考古分野の第二―四章を読んだ感想は正直なところ、従来の市町村史の考古資料編と比較してかなり異なった特徴をもった構成をとっているということである。それはページ数の割り振りに端的に表されている。

考古分野全体五六九ページのなかで、三分の二弱のページ数が津軽ないし青森県史の資料編的な記述に割かれており、地元弘前市の遺跡・遺物に割かれたページ数は三分の一強である。弘前市が津軽の中心であるため、津軽地方の資料収集をとくに心がけたと言う点は理解できるようにも、弘前市史であり、しかも読者の大半が弘前市民であることを考慮すれば、他の地域以上に弘前市の遺跡・遺物にもっと多くのページを割くべきではなかったと思われる。そして、弘前市内の遺跡・遺物について総括的かつ具体的に（たとえば、弘前市には現在何ヶ所の遺跡があつて、どの様な場所にあるのか。それらの遺跡からどのような遺構や遺物が発見されているのか。それらの遺跡はどのような特色があるのか・・・）、△附図▽の遺跡分布図と対照させながら述べてほしかつたと思う。このことについては、今後予定されている通史編とのかかわりがあると思われるので、これ以上述べることはできないが、本書を手にした多くの方は、このようなこともあわせて知りたかつたのではないかと思われる。

また、どの市町村史についても、考古分野の記述には難解な用語（専門用語・遺跡名）が多いというのが一般的な評価である。筆者らがかわつた『五所川原市史 史料編一』（平成五年刊）の考古編についても、かなり分かりやすくしたつもりであつても、いく人かの方から同様の感想を漏らされたことがある。本書にもそのような箇所が散見される。第

一章「地形と地質」に付せられているような用語解説があればよかつたと思われるが、少なくとも一般の読者にとつて難読性のある漢字にはできるだけルビをふつたほうがよかつたかと思う。また、絶対年代が入つた考古年表があれば、より年代的な理解が得られやすかつたと思われる。

しかしながら、このようなおもに本書の構成に対する感想とは別に、第二―四章の旧石器―弥生時代、古代―近世に関する記述は、各時代の専門家が当たつており、津軽・本県の遺構・遺物の総括・集成を目指しつつ、豊富な写真・図・表とともに各時代・各事項についての確にとらえたものであり、質量ともにまさに圧巻と言えよう。津軽の埋もれた歴史に興味をもっている読者にとつては、各時代の概要が具体的に記述されているためきわめて理解しやすくなっている。本書を読みながら、考古学を学び始めた三十年前頃の県内の状況を思い起こし、あらためて津軽や本県の埋もれた歴史が、今このような段階にまで掘り起こされ、記述されるまでになつていくことに大きな感慨をもつた次第である。津軽や本県の考古・歴史学を学んでいる方や興味をもっている方にぜひ読んでいただきたい一冊である。

（ふくだ・ともゆき 日本考古学協会々員）

（弘前市 A 五版 六四九頁 平成七年一月刊 古代・中世編共八三〇〇円）